



	2024-43
監督・脚本：ジョナサン・グレイザ	
—	
原作：マーティン・エイミス『The Zone of Interest』（14 年）	
（『関心領域』北田絵里子訳（24 年））（早川書房刊）	
出演：クリスティアン・フリーデル ／ザンドラ・ヒュー／ラル フ・ハーフォース／サッシ ャ・マーズ／フレイア・クロ イツカム／イモゲン・コッゲ	

みどころ

ドイツでは戦後 80 年近くになる今でも、「ホロコーストもの」「アウシュビッツもの」が毎年作られている。本作もその 1 つだ。しかし、本作には「塙の向こう側」のガス室はもとより、銃殺シーン等は一切登場せず、「塙のこちら側」で丹精込めた庭園とお屋敷の中で幸せに暮らすナチ幹部の家族の姿が描かれるだけ。そんな本作が、なぜ「アウシュビッツもの」なの？

本作は『ハンナ・アーレント』（12 年）との比較対照が不可欠。「悪の凡庸さ」ですべてが「仕方なし」になるの？その再考が必要なのでは・・・？

うーん、その答えは難しい。しかし、ドイツ人が今もなお、そのことを毎年しっかり考えているのなら、日本もそれに負けずに、「憲法改正」論議等を進める必要があるのでは・・・？

■□■この邦題はナニ？なぜカンヌでグランプリを？■□■

弁護士稼業を 50 年もやっている中、私はさまざまな事件で、さまざまな書面を書いてきた。また、さまざまな概念にも出会ってきた。しかし、そんな私でも、「関心領域」という言葉は聞いたことがないし、使ったこともない。しかして、本作のパンフレットの「PRODUCTION NOTES」には、「タイトルの関心領域（英：The Zone of Interest／独：interessengebiet）は、ポーランドのオシフィエンチム郊外にあるアウシュビッツ強制収容所群を取り囲む 40 平方キロメートルの地域を表現するためにナチス親衛隊が使った言葉だ。」と解説されている。それを邦訳（直訳）すれば、「関心領域」となるわけだ。なるほど、なるほど・・・。

1974 年に弁護士登録をして、弁護士業務に取り組んできた私は、それだけで十分満足していたが、2001 年に事務所を自社ビルに移転したことを契機として事務所のホームページ

を開設し、映画評論を書き始めた。その結果、2024年5月の今、既に『SHOW-HEY シネマルーム』の出版は全54冊に至っている。それは、私の「関心領域」が映画鑑賞やその評論であったためだ。

他方、本作の監督ジョナサン・グレイザーは2014年にマーティン・エイミス原作の小説『The Zone of Interest』に出会ったそうだが、彼の「関心領域」はどこにあり、どのように広がっていったの？それは、あっと驚く、タイトルどおりの本作の構成をみれば、誰でも理解できるはずだ。

■□■本作は「アウシュビッツもの」？家族の日常モノ？■□■

私は、“日本が「戦後75年」を迎えた2020年に”『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集―戦後75年を迎えて―』を出版し、多くの「アウシュビッツもの」の評論を掲載した。その第3編第2章「アウシュビッツ強制収容所解放75年！こんな実話も！あんな実話も！」に『サウルの息子』（『シネマ37』152頁）を掲載したが、同作ではじめて知った「ゾンダーコマンド」の実態は身が震える思いだった。

しかして、本作のチラシには、「本年度最大の衝撃作にして、最大の問題作が今春、あなたに問いかける。」とうたわれ、「アウシュビッツ収容所の隣で幸せに暮らす家族がいた」とも書かれている。しかし、チラシの写真には、プールを含む広い庭園の中で、多くの家族が楽しそうにパーティーを開いている様子が写っているから、これは「幸せに暮らす家族」の写真だ。さらに、本作のスクリーン上には、『サウルの息子』で見たような凄惨な場面は一切登場しないから、なぜ本作が「アウシュビッツもの」なの？

そんな疑問を持ちながら写真をもう一度よく見ると、庭園の一方には高い塀があり、そのコンクリートの塀には蔦が這っていることがわかる。この高い塀は一体ナニ？

「天国と地獄は紙一重」とは、よく言われる格言だ。また「塀のこちら側と向こう側」という場合の塀は刑務所の塀を意味しているが、この写真に見る高い塀は一体ナニ？

■□■主人公ルドルフ・ヘスの序列は？彼の役割は？■□■

“第三帝国”＝ナチスドイツを率いた総統ヒトラーに忠誠を誓い、反ユダヤ主義を貫いた「極悪非道の三悪人」として、普通は①ヨーゼフ・ゲッペルス、②ハイドリヒ・ヒムラー、③アドルフ・アイヒマンが挙げられている。ところが、『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』（16年）（『シネマ40』190頁）（『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集―戦後75年を迎えて―』50頁）では、ヒトラー、ヒムラーに次ぐ「ナチス第3の男」は「金髪の野獣」と呼ばれた男ラインハルト・ハイドリヒとされている。他方、本作の主人公は、アウシュビッツ収容所の司令官で親衛隊中佐であるルドルフ・ヘス（クリスティアン・フリーデル）だ。しかして、彼のナチスにおける序列は？その役割は？

「アウシュビッツもの」映画は多いが、その中で私が最も影響を受けたのは『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）（『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集―戦後75年を迎えて―』336頁）だ。私はそもそもハンナ・アーレントなる女

性哲学者の名前も、彼女が書いたアイヒマン裁判の傍聴記も知らなかったが、傍聴記の結論を「悪の陳腐さ（凡庸さ）」としたことにビックリ！これによって「地位こそナチス親衛隊中佐と低いが、『ユダヤ人問題の最終的解決』（ホロコースト）に関与し、数百万人の人々を強制収容所に移送するにあたって指揮的役割を担った、ルドルフ・アイヒマン」について、それまで全世界の人々が持っていた価値観が大きく変わることになったわけだ。

『ハンナ・アーレント』は、彼女の傍聴記を原作とする映画だから、被告人にされているアイヒマンの妻が登場していたが、本作の主人公ルドルフ・ヘスは「塙のこっち側」では愛する妻ヘートヴィヒ（ザンドラ・ヒュラー）や多くの子供たちに囲まれて幸せな家庭生活を送り、「塙の向こう側」では効率よく荷を焼却すること（＝ユダヤ人を殺すこと）を本業としている男だ。

彼の名前はルドルフ・ヘスだから、これは架空のもの？しかし、彼の地位は親衛隊中佐だから、アイヒマンと同じ。すると、ルドルフ・ヘスは本当はアイヒマンのこと？それは一つの「関心領域」かもしれないが、本作の本質とはあまり関係がないので、その点にはこだわらない方がいいのでは・・・。

■□■恐ろしい情景だって慣れれば平気！日常の風景に？■□■

『ハンナ・アーレント』は「悪の凡庸」がキーワードだったが、それが理解できれば、アイヒマンが極悪人だったからアウシュビッツ収容所の所長の仕事を全うできたわけではなく、凡庸な人なら誰でも、その役割は務まるわけだ。すると、あなただって、そして私だって、効率よく“荷”を焼却すること（＝ユダヤ人を殺すこと）を日々の仕事として真面目に励むことは可能・・・？

本作は導入部でも中盤でも、高い塙の「こちら側」で、ヘス一家が幸せな家庭生活を送る姿が描写されていく。そのハイライトは中盤に見る、邸宅に呼び寄せた母親にヘートヴィヒ自身が設計し、植栽し、プールや温室まで設置した楽園のような庭を案内するシーケンスだ。軍人の妻でありながら、夫ルドルフの任地であるアウシュビッツ収容所で理想的な庭園と理想的な家族を手に入れたヘートヴィヒは、今高い塙の「こちら側」で戦争中であるにもかかわらず、幸せの絶頂期を過ごしているわけだ。さらに、本作導入部では、家の中で女たちが服の山からそれぞれ自分の気に入った服を選ぶ風景が描かれる。また、子供たちがベッドに入って寝る前に歯で遊ぶ風景が描かれる。しかして、これらの服や歯は一体誰のもの？なぜヘスの家の中にこんなに大量の服や歯があるの？

他方、ルドルフの仕事場は塙の「向こう側」だが、稀には家に客（上司）を招いて仕事の打ち合わせをすることもあるらしい。そこでルドルフが報告している内容を聞くと、それは、「ふたつの焼却炉を稼働させ、効率よく“荷”を焼却すること」だが、そのアイデアを上司から褒められたルドルフは本当に嬉しそうだ。ルドルフの誕生日を祝うため、軍服を着た男たちが邸宅に集まり、「司令官に仕えることが光栄だ」と言いながら固い握手を交わしていたが、そんな姿を見ていると、ルドルフもアウシュビッツの収容所の司令官とし

て幸せいっぱい的人生を歩んでいることがよくわかる。本作では塀の「向こう側」で行われているユダヤ人の大量虐殺の姿は一切描かれず、時々銃声や悲鳴が聞こえるだけだが、そんな恐ろしい情景だって、慣れれば平気！凡庸な人間には、それが日常の風景になるわけだ。そのことが本作を見ているとジワリ、ジワリと染み込んでくることに。

■□■軍人に転属命令は不可欠！その拒否はあり得ない！？■□■

個人企業や特定の地方・地域だけで展開している中小零細企業の場合は転勤はないが、一部上場企業はもとより、それなりの収益と規模を誇っている会社に就職すれば、転勤の宿命がつきまとうはずだ。大手の銀行では、1、2年毎の転勤が出世コースになっており、それは軍人も同じだ。軍人の場合転勤と言わず転属というはずだが、本作のルドルフはアウシュビッツ収容所の司令官に任命されてから何年か経つ？妻のヘートヴィヒは丹精込めて作った庭園を気に入り、都心から遠く東方に離れたアウシュビッツで過ごす田舎生活が、もともと憧れていた生活にピッタリだったから、突然夫から聞かされた転属話におかんむりだ。

私の事務所のすぐ近くに大阪天満宮がある。これは菅原道真を祀った神社だが、菅原道真が九州の太宰府に転勤（左遷）されたのは有名なお話だ。「東風（こち）吹かばにほひをこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな（春な忘れそ）」は有名な句だ。あの当時の、都から九州太宰府への転勤は「島流し」に似たような、はっきりした左遷だったが、今ルドルフに下された転属命令はそうではなく、榮転で、さらなる出世コースに乗っていくものだから、妻としては本来喜ぶべきものだ。ところが、この転属をヘートヴィヒが完全に拒否し、「ここでは望むものがすべて目の前にあり、健康で、幸せな夢に見た暮らしがある、それは“総統”が言うとおりの生き方だ」と宣言したことを受けて、ルドルフはどうするの？

本作では「親愛なる閣下。アウシュビッツ収容所の司令官であるヘス親衛隊中佐が転属すると聞きました。同志ヘスは4年間で偉業を成し遂げました。ヘスは囚人の扱いを熟知し、軍需産業とも密接な関係にあり、画期的な方法を実現しました。彼は模範的な東方のドイツ人開拓者であり、理論の実践が強みです。彼の資質はあまりに多く、転属が理不尽なのは明白と言えます」という手紙が読み上げられるシーンが登場するが、これは一体誰がいつ書いたの？こんな手紙をヒトラー総統宛に出して大丈夫なの？

■□■サーモグラフィの映像や現代の映像をどう評価？■□■

本作は「塀のこちら側」におけるヘス一家の日常生活を描くものだから、「アウシュビッツもの」と言えるのは、ルドルフがアウシュビッツ収容所の司令官で、日々その任務の遂行に邁進しているナチ幹部ということだけだ。また、「アウシュビッツもの」と思えるシーケンスは、「塀の向こう側」に並んでいるであろう多くの建物の煙突からモクモクと煙が上がっていることや、時々聞こえてくる銃声や悲鳴だけだ。

他方、そんな本作は、明るい太陽の下で一家揃ってのピクニックや川での水浴びシーン、さらに美しい庭園の風景が何度も登場してくるが、時々真っ黒なスクリーン上にサーモグ

ラフィーの映像が登場してくるので、それに注目。そこに見る、わかったようなわからないような(?)少女の動きは、一体何を意味しているの？

また本作では、妻ヘートヴィヒが見せる強い転属拒否の意思に悩まされるルドルフの姿が描かれるが、良き仕事人(軍人)であることは当然とした上で、さらに良き夫であり、良き父でもあるルドルフは、結局妻の意思を尊重してナチの上層部に対して上記のような手紙(上申書)を提出するので、その過程にも注目したい。そこで私がびっくりしたのは、ルドルフが思考しているシークエンスの中に、突如、1947年7月に開館された、

現代のアウシュビッツ・ビルケナウ博物館の姿が登場することだ。こりゃ、一体ナニ？こんなやり方は“禁じ手”なのでは？私は一瞬そう思ったが、さてジョナサン・グレイザー監督の思惑は如何に？

■この記事に注目！ホロコーストは上位下達か 問い直す■

「関心領域」という変わったタイトルの本作のチラシには「目をそらしてはいけない」、「共犯という罪の考察」「そこには、いつもと変わらない幸福な日常があった」等のコメントが載せられている。本作は夫の転属命令を巡って一瞬夫婦の間に亀裂が走るが、ルドルフが妻の意見を尊重して、「単身赴任」とすると決めたことによって、夫婦関係においても仕事関係においてもコトなきを得た上、ラストにはルドルフに再度の“朗報”が届くことになるから、めでたし、めでたし・・・。

「塀の向こう側」では煙が昇り、時々銃声と叫び声が聞こえてくる毎日は、ヘス一家にとっては“日常生活”であり、その中に家族の幸せも詰まっているわけだ。そんな本作は、『ハンナ・アーレント』を知らなくてもそれなりに理解できるが、本作の本質に迫るためには同作との比較対照が不可欠だ。

そう思っていると、2024年6月6日付朝日新聞は、平賀拓史氏の署名記事を掲載した。そのタイトルは『ホロコーストは上意下達か 問い直す』。そして、その見出しには「映画『関心領域』に見るナチ幹部の実像」、「主体的に虐殺に加担『悪の凡庸さ』再考促す視点」とあり、本文も「実践競い合った親営隊」「アーレントの意図離れ」という「見出し」の文脈に沿って書かれている。したがって、これを読めば両者を対比する必要性がよくわかるはずだ。もっとも、この記事は、『検証 ナチスは『良いこと』もしたのか?』の共著者である田野大輔・甲南大教授と、『エルサレム〈以前〉のアイヒマン』を21年に邦訳した香月恵里・岡山商科大教授(現代ドイツ文学)の指摘を引用するだけで終わっているので、いささか私にはツッコミ不足と言わざるを得ない。さて、両者を比較対照した上でのあなたのご意見は？

2024(令和6)年6月7日記